



那須与一伝承館通信〈第23回〉

○萌葱系威大鎧(復元)

今回は那須与一伝承館が収蔵する資料の中から、萌葱系威大鎧を紹介いたします。

本品は、平安時代後期に那須与一宗隆が着用していたとされる大鎧を復元したレプリカです。大鎧は平安時代中期に成立し、特に源平合戦の時代には盛んに用いられました。兜を合せると30キログラムにもなる騎兵用の鎧で、弓矢による防御に優れていました。中世では、鎧といえは

この大鎧のことを指しており、「大鎧」の呼称が定着するのは江戸時代以降のことでした。

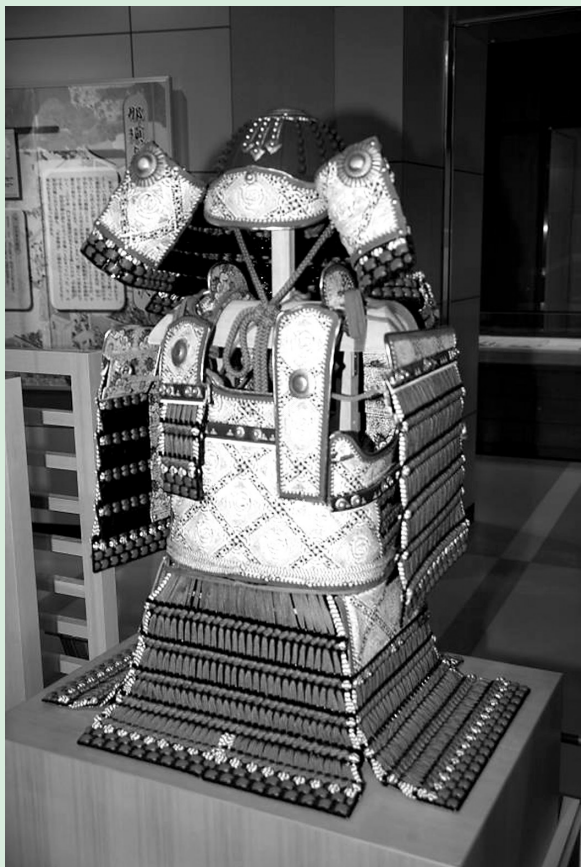
本品は、『平家物語』で与一の装備を記した箇所「萌葱威の鎧着て」とあることから、威毛に萌葱色(青と黄の間の色)の組み紐を用いて復元したものです。

現在、本品を展示しております。ぜひこの機会にご覧ください。

■問い合わせ

那須与一伝承館

TEL (20)0220



萌葱系威大鎧(復元)
(那須与一伝承館蔵)

彫刻

市内で作られた作品とその作者

周遊 47

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。

この作品は黒羽屋内温水プールの南、黒羽運動公園敷地内の土手に設置してあります。



題名のとおり、この作品は塔の形をしています。その塔は、側面にいくつかの階段を有し、いくつかの窓(扉)が開いています。そして、その塔は最上階から4分の1程度のところで折れ曲がっています。

塔について

きくち しんじ
菊地 伸治 日本 2012年

『石に刻まれた眼は永遠に開く』作者が図録に残したコメントは西脇順三郎氏の詩『眼』から引用したものだと思われます。



菊地 伸治氏

「その眼の見つめる先には、天を目指す塔があるように思うのです。」作者は、この詩を鑑賞し、その思いを作品として形にしたのでしょうか。

作者は山形県生まれの菊地伸治氏。東京造形大学研究生を終了後、平成5年度文化庁芸術家在外研修員として渡欧。1990年に東京オブジェ・コンペティションで入選(新東京都庁に作品が設置される)、日本・韓国人作家による交流展参加など、多数のイベントに参加されています。2012年現在において、国画会会員、日本美術家連盟会員。

設置場所案内図(★印)



■問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23)8718